

1年ぶりに訪れたアメリカの空港・タクシー事情

空港内にもある宗教施設

昨年11月、パナマへの往路で1年ぶりに訪れたヒューストンのジョージ・ブッシュ国際空港。入国審査場には今回も200人あまりの乗客が並んで待っていた。一昨年、「風と共に去りぬ」出版70周年の取材のため、当地乗り換えでアトランタとニューオーリンズを訪れた際には、40あるブースに係官が14人しかいなくて能率が悪かった。今年も係官は少なかったが、列が詰まってくると別サイドにあるブースに誘導の工夫がなされ、入国審査そのものは比較的スムーズに終わった。

両手の人差し指の指紋を取り、コンピュータで顔写真を撮るのは昨年と同じである。また搭乗の際、セキュリティチェックで靴を脱ぎ、ズボンのベルトをはずさなければならぬのも同じだった。

半面、帰路のニューアーク国際空港（ニュージャージー州にありニューヨーク市に近い）ビル内で、“さすがはアメリカ”と感銘を受けた施設を目にした。それは“Room for Meditation（お祈りのためのサロン）”があったことである。乗客が通る広い通路に、遠くからでもすぐわかるような案内板が、部屋の入り口の壁の2メートルくらいの高さのところに掲げられていた。

私も敬虔な仏教徒。もしかしたらお祈り（勤行）もできるかもしれないと、ドアを開け中に入ってみた。「ここでは靴を脱いでください」との掲示。10メートル四方ほどの室内には、カトリックとプロテスタント用に別々に祭壇があり、20ほどの椅子が並ぶ。左側が礼拝室、上に案内板があるイスラム教徒用と思われるじゅうたんもあった。



朝9時。時間帯にもよるのだろうか、室内には誰もいなかった。残念ながら勤行をできるような状態にはなかった。もっとも、仏教にも多数の宗派や祈りの形式があることからすれば、それも無理なのかもしれない。ともあれ、宗教を重んじ、信仰を大切に、またすべてに平等に対応しようとするアメリカ社会の心の広さをかいま見る思いだった。

世界中からのドライバー

タクシーは往路のヒューストン、帰路のニューヨーク（ニューアークも含めて）で計4回利用した。そのつど運転手に話しかけたが、今回も彼らの母国は多様だった。ヒューストンではエチオピアとエジプト、ニューヨークではドミニカとエクアドルから来たドライバーだった。それぞれが母国語なまりの英語を話す。

最初のエチオピアからの運転手には閉口した。空港で私のトランクを奪うように車に積

み込み運転を始めたのはいいが、なんと目的のホテルとは反対の方向へ。まだ地理に明るくなく、メーターが 80 ドルになるまで走ってから気がついたのである。

途方にくれた運転手は「ホテルを確認してみる」と自信なげ。ところが彼の携帯電話は故障中。そこで、なんとアメリカに着いたばかりでまだ調整もしていない私の携帯電話を借りて、ホテルに場所を確認しつつの運転になったのである。

こちらは成田からの長旅で疲れていて時差で眠いのに、1 時間以上も走り回られ、しかも料金 160 ドルを請求されたのだ。当方には何の非もない。ここは強く出るに限る。そこで私も日本語なまりの英語をまくしたてて反論、ドライバーの非を責め、100 ドルまで下げさせたのだった。



成田への帰路。ニューヨークで 9.11 のテロ爆破点グラウンド・ゼロを訪れた。運転手はエクアドル出身。私もかつて同国を訪れたことがあることから話が弾んだ。首都キト郊外にある赤道標が大きく変わったこと、大陸から 1000 キロ西の赤道直下にあるガラパゴス諸島も、環境汚染から動物の生息も危機に瀕していること等まで話題になった。グラウンド・ゼロで

9.11 のテロのあった地点に立つ

は記念写真を撮ってもらったり、アメリカでスペイン語が通じたうれしさに、思わずチップもはずんでしまった。

一昨年、乗ったタクシーの運転手の母国はベトナム、ガーナ、ナイジェリア、そしてアメリカだった。そして今回も運転手は四つの国からやってきていた。この人種と出身国の多様性！ 単一民族国家、そして外国人の受け入れに厳しいわが国と比べて、こんなにも大量の異民族を受け入れ消化していく大国アメリカの懐（ふところ）の深さに改めて感銘したのであった。